神戸新聞 2021年03月08日 月曜日 面名 夕特２ 夕４ 2ページ

ぐるっと音楽紀行

旅するピアニスト　赤松林太郎　♪5

ハンガリー・ブダペスト

ぬくもりのある音があふれ

私はレコードに囲まれて育ちました。後年ハンガリーに行くことになったのは、幼少の頃から聴いてきたレコードの中に、多くのハンガリー人音楽家がいたことと無関係ではありません。

ハンガリー人ピアニストは今も昔も百花繚乱で、ロマ（ジプシー）の音楽を想起させる超絶技巧と即興の巧みさで知られ、リストを得意としたジョルジュ・シフラは憧れのピアニスト。シフラが審査員を務めた1956年のリスト国際ピアノコンクール（かつてのブダペスト国際音楽コンクール）で世に出たのが、私がパリで師事したフランス・クリダ先生でした。

初めてハンガリーを訪れたのは2000年の暮れ。当時のハンガリーは、1989年に社会主義の終焉を迎えて10年ほどしかたっておらず、全体的に貧しい印象でした。ただ、音楽は街にあふれており、毎晩のように一流のコンサートが上演されていました。ブダペストのあの貧しさや暗さと、その中から出てくるぬくもりのある音楽とのギャップに驚かされました。子どもの時に聴いた、あのレコードの音そのままだったのです。

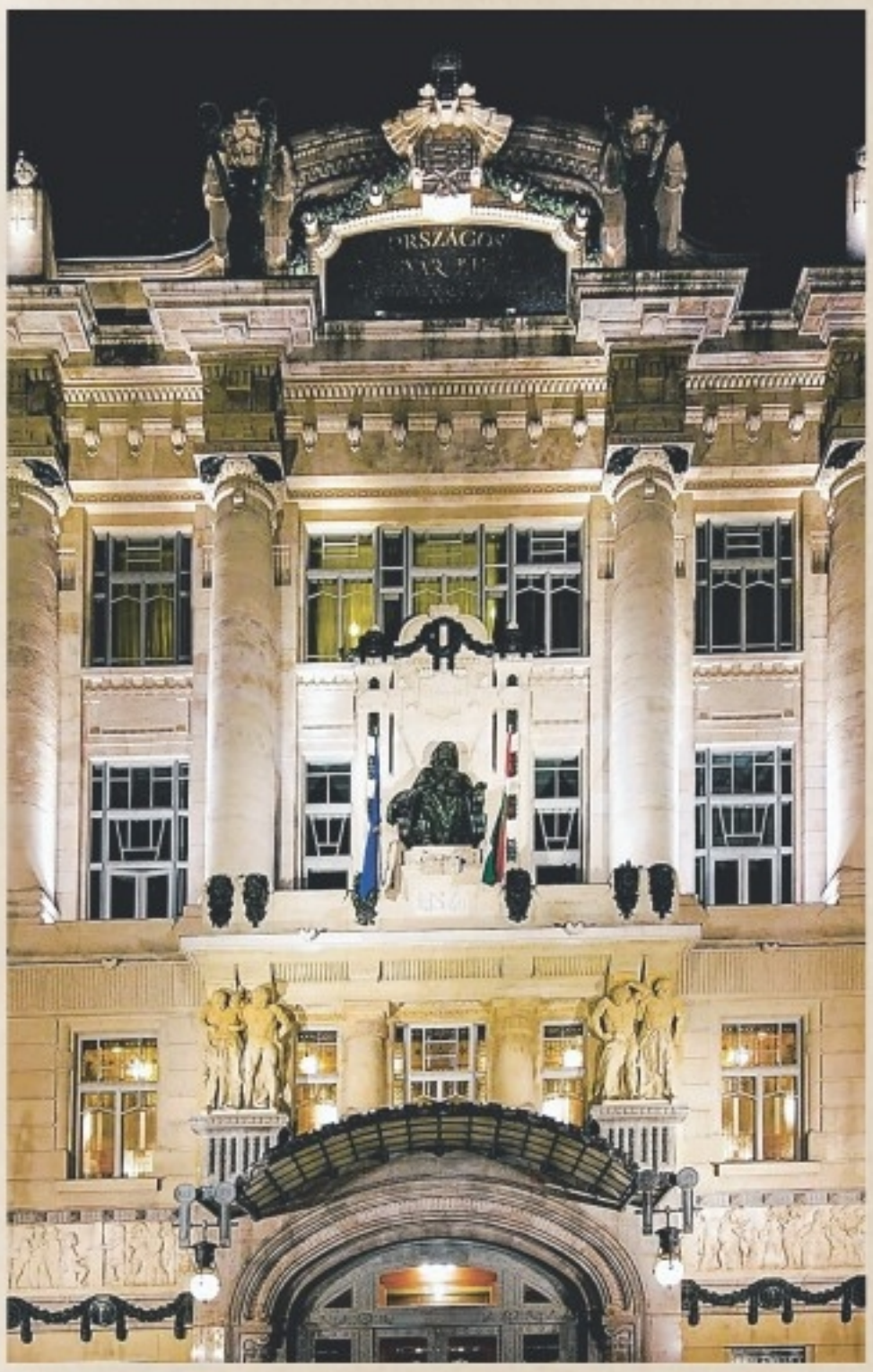
それからというもの、不思議な縁にたぐり寄せられるようにハンガリーをたびたび訪ね、いつしか第二の故郷というべき存在になりました。2014年からブダペストのハンガリー国立リスト・フェレンツ音楽大学（リスト音楽院）との共催によるマスタークラスを始めたのも、長年にわたる人々との交流がきっかけでした。

13年秋にリニューアルオープンしたリスト音楽院は、それまでの灰色に塗り固められていた内装とはまったく異なり、アールヌーボー風の装飾がぜいたくに施されています。社会主義時代に覆われたコンクリートの壁を剝がすと、この音楽院が建設された当時の、ハプスブルク帝国末期の爛熟したハンガリー・ロマン派時代がよみがえったのです。

世紀末の薫りが充満するこの学びやで、春休みの1週間ほどを学生たちと過ごします。初年度は私を含めて3名の教授陣でスタートしましたが、受講者が倍近くになった16年からは計6名で指導にあたっています。その際加わってもらった一人がダーヴィッド・バール。彼は私よりもやや年下ですが、03年にマドリードの国際コンクールで共に入賞（私が第1位、彼が第3位）して以来の友で、私が最大級の信頼を寄せている、ハンガリーにおける同世代の筆頭格。

テクノロジーがこれだけ進歩した今日でも、ヨーロッパは距離的にも精神的にも遠く、クラシック音楽の本場は海のはるか向こうにあります。小さな働きではありますが、これからの世代を担っていく若者にできるかぎりの豊かな環境を用意して、音楽で満たしてあげたいと願っています。

◇第2月曜に掲載します。



ハンガリー国立リスト・フェレンツ音楽大学の正面玄関＝いずれもブダペスト（赤松林太郎さん提供）

マスタークラスで指導にあたる赤松さん

あかまつ・りんたろう　1978年、大分県生まれ。２歳から神戸で育つ。兵庫高、神戸大発達科学部卒。パリ・エコール・ノルマル音楽院高等演奏家資格首席取得。2007年に帰国し、国内外で活動。洗足学園音楽大客員教授、大阪音楽大特任准教授。神戸市在住。

(C)神戸新聞社 無断転載 複製および頒布は禁止します。